



ティー・ブレイク

NO. 98

悲喜こもごも

1年に1度の弁理士試験。結果を見ると、落ちている。「何で?!」と思い、私のような者のところにやって来る。

そうして、反省点について指摘をし、次への活力に繋げようとするのであるが、そう簡単にはいかない。それは、「何であいつが受かって、俺（私）が落ちるのか」ということがあるからである。

ところが、色々なデータを集めた上で、個々人について「君のここが悪かった」という評価はできるにしても、「何であいつが受かって、俺（私）が落ちるのか」という理由については、正直なところ、受験予備校講師を務めている私でさえ、全く分からない。であれば、それこそ講師などやったことがない彼らに分かるはずもない。

ただ言えることは、講師にすら分からないことを考えても答えなど出るはずもなく、「自分の事情を考えるだけでも精一杯なはずなのに、他人の事情まで考えるのは、合格を遠のかせる」というだけのことである。

ところで、力仕事というのは加算できる。100kgの荷物を運ぶためには、50kg重の力を発揮できる人夫を二人連れてくればよい。しかし、知識労働の場合には、単純に加算するわけには行かない。例えばTOEIC800レベルの仕事が求められているところへ、780レベルの人を10人連れて行ったところで、800レベルの仕事仕上げさせることはできない。

我々の仕事もそうである。半人前が100人揃ったところで、一人前の仕事を仕上げることはできない。だからこそ、経営の側でも、人数を多く集めるよりは、良い人材を集めることに頭が向く。当然のことながら、個々人に対しては大きなスキルが求められる。

であるからこそ、個人のスキルアップに関することについては、その個人に対して猛烈なストレスが課されることになる。弁理士試験とて、そのひとつである。

「あいつが受かったのに何で俺が?」という事態に遭遇するのは、それこそとても辛いことではあるが、一実務家としての側面からすれば、試験の結果に喜ぶ人、そして大変に悲しむ人の、そのいずれにも、あえて試験が難関とされているその理由は分かって欲しい、と心から思う。

こうして一人前の知的財産プロを志す者たちに対して1年に1度の試練が訪れ、新人弁理士が輩出されていく。そうして、この業界にもまた新たな季節がやってくる。

(正)